

巻頭言

琉球大学 農学博士 岡田 正三

2022年のノーベル生理学・医学賞を受賞したスウェーデンのスバンテ・ペーボ博士はOIST(沖縄科学技術大学院大学)の客員教授である。OISTでの会見の中で、若者へのメッセージを求められると、「興味があることをするのがよい。好きなことはうまくやれるもので、結果も出せるだろう」と述べていた。また、2016年にノーベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典博士は受賞決定後の第1回記者会見で、「『あれ?』と思う気づきをとてとても大事にしてほしい。」「役に立つ』という言葉が社会をだめにしている。本当に役に立つのは10年後、100年後かもしれない。」と述べている。

自分のことで恐縮であるが、私はサトウキビが大好きである。サトウキビ圃場に一日中居ても全く飽きないほどのサトウキビばかりであるが、生まれつきではない。植付けをし、管理・観察、糖度分析や利用加工の試行錯誤などを通して培われたもので、問題意識は断続的で、一直線あるいはスパイラルなどで描けるように深化・発展したものではない。

生育の計測は品種ごとにサンプルを10本抽出し、仮茎長、葉身、茎径、完全展開葉・未展開葉の葉数などであるが、日々の生長は一律でなく、発芽、萌芽や茎や葉の伸長などの様子は驚きや感動を伴う。仮茎長や葉身などの伸長も注意深く観察すればするほど新たな発見や疑問が生じてくる。(子どもたちのサトウキビを教材とした総合的な学習では、利用加工の含蜜糖のできあがる瞬間が最も歓声が上がる場面であったが)搾汁液や含蜜糖の色や味、バガスをを用いての製紙のし易さも品種により異なり興味深い。問題意識の芽生える対象・とき・場などは同一でなく人によって異なるであろうが、問題意識が芽生えれば、観察や実験したいことがどんどん増してくる。目前の研究に限定すれば、無駄になることも生じるが、それも自己決定でのことであり、次に生かせばよいとしている。

計測等が主体的な活動でなく、人(教師)から言われてのことであつたり、仕事であつたりすればどうであろうか。おそらく義務としての単なる計測に終わり、疑問や発見などの新たな問題意識は生まれない(あえてつくらないこともある)のではないだろうか。

好きなことには主体的な学びが生じ易そうであるが、学校現場では、育成すべき資質・能力を整理し、指導内容等を検討し、「どのように学ぶか」を考えて授業をする。その営みを通して、諸活動の中で驚きや感動が得られるような感性や、粘り強く取り組む態度などをどのように育てていくのか。探究にはすぐに役に立たなくてもいつしか大きな発見や成果につながることもある。無論、専門家を養成するわけではないが、子どもたちには、一時でも夢中になるときや場、自己満足であれ成就感を持たせる機会はつくりたい。少なくとも教師が過大な指図をしたり、子どもの発想による取り組みに「そんなことをしても意味がない」などと安易に抑止したりする環境下では探究する意欲や粘り強く取り組む態度などは培われにくいであろう。とりわけ年少者には、機をとらえての適切な見取り・支援などが肝要で、あらためて教育研究の意義を再認識する次第である。

学術的には未来を見通し新たな視点を理解し広めることは意義深い。一方、教育にはおびなりにできない不易もある。簡単でないが、不易部分を踏まえたうえで時代の変化に即した教育実践を推進すべき研鑽は教職に就く者として必修であろう。「生きる力」、そして「学びに向かう力」などは、狭義の授業改善だけでなく、全教育活動(カリキュラムマネジメント)において意識されて培われるものだけに、本紀要の研究・理念が「生活科・総合的な学習」の研究者だけのものにとどまらず、広く多くの教育者によって読まれること、現場の実践でも生かされることを期待したい。

本講座紀要を読み返すにつけ、自らの未熟さを痛感するとともに、年を重ねるとともに研究の深まりを感じとることができた。また、投稿者の中から、学校現場で着実に実践を重ねてみえる方、様々な分野で社会的な立場を得て活躍をなさってみえる方々を輩出していることを確認することもでき、末席を汚した者としてうれい限りである。みなさまのさらなるご発展を祈る。